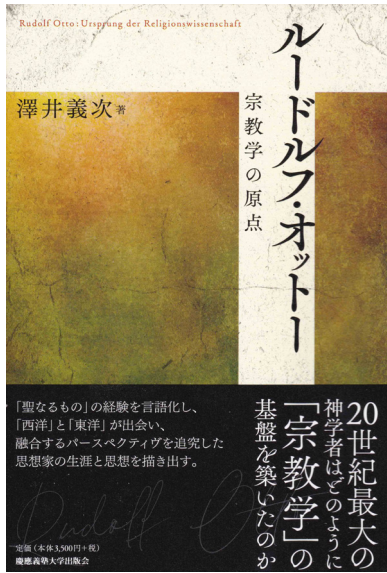


天理大学教員の近著より — 2019 年度天理大学学術出版助成による著作

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

『ルードルフ・オットー — 宗教学の原点 —』 澤井義次著、慶應義塾大学出版会、2019 年

ルードルフ・オットー Rudolf Otto (1869-1937) と言えば、『聖なるもの』(1917) が有名である。この著作によって、プロテスタント神学史における彼の本来的意義が確立されたと述べたのは、パウル・ティ



リッヒだった。ルター派の神学研究者として学問的キャリアをスタートしたオットーは、宗教哲学者であると共に、キリスト教とインドの宗教との比較宗教研究者でもあった。本書は、オットーの宗教学の全体像を解明し、分かりやすく読み解いた画期的な著作である。

オットーは、神学者として初の世界旅行者になったと言われる。とくに

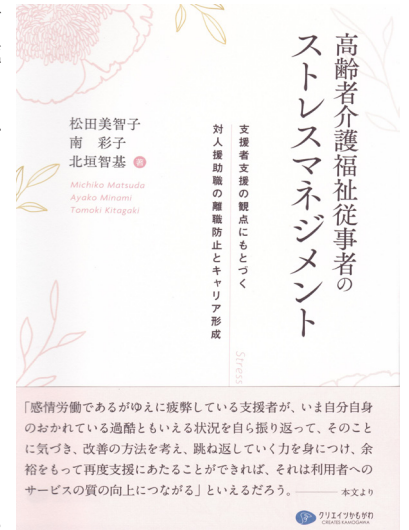
インド、ビルマ、日本、中国を訪れて東洋の諸宗教に出会ったことが、彼の宗教学を深みと幅のあるものにした。彼は東洋の旅の中で世界宗教博物館の構想を得たが、それはマールブルク大学に創設された「マールブルク宗教博物館」として実現した。マールブルク大学は天理教や天理大学とも縁が深い。同大学で開催された国際宗教学会議に 2 代真柱が出席したのを契機に、天理大学と半世紀以上にわたり交流してきた歴史がある。

キリスト教以外の諸宗教へのオットーの真摯な関心や開かれた姿勢は、「宗教人類連盟」としても結実した。これは、無信仰や迷信に対して諸宗教が協力して立ち向かおうとする国際的な宗教間対話の試みであった。残念ながらドイツ国内外をめぐる情勢のために、この連盟は 1933 年までにその活動を終えたが、こういうエピソードからもオットーの宗教観の開明性が見取れる。

本書は序章・結論を含めて全 10 章構成。19 世紀以降のドイツの神学・宗教学におけるオットーの意義について序章で述べた後、第 1 章ではキリスト教神学者としての彼の生涯、第 2 章ではインドを原点とする東洋への旅について概説。次に、『聖なるもの』における比較宗教論の構造 (第 3 章)、オットーの神学・宗教における宗教史学派の影響 (第 4 章)、また彼の独自の宗教史観である、東洋と西洋の宗教における平行性理論 (第 5 章) が続く。そして、彼の「絶対他者」の概念とヒンドゥー教の評価を論じ (第 6 章)、救済思想としてのヴェーダ哲学の議論を検討し (第 7 章)、イデオグラム (表意記号) に注目したオットー宗教論の新しい読み込みを行う (第 8 章)。第 5 章～第 8 章は、インド学に造詣の深い著者ならではのオットー論が展開され、学術的に読みごたえのある諸章である。最後に結論として、ルター派神学者、宗教哲学者、比較宗教研究者としてのオットーの 3 つの顔を総括する。

『高齢者介護福祉従事者のストレスマネジメント— 支援者支援の観点にもとづく対人援助職の離職防止とキャリア形成 —』 松田美智子・南彩子・北垣智基著、クリエイツかもがわ、2019 年

対人援助には 3 つの H が必要だとよく言われる。すなわち、温かい心 (Heart)、冷静な頭 (Head)、確かな腕 (Hand) である。しかし、昨今の介護福祉の領域では、慢性的な人手不足や施設での過重労働、また家庭内の老老介護など、数多くの問題を抱えており、援助者の負担やストレスも相当なものがある。見過ごされがちなのは、対人援助が感情労働だという側面である。3 つの H で言えば、まさに温かい心 (Heart) に関わる問題だ。介護従事者は相手の気持ちに寄り添い、献身的な介護を行おうとすればするほど、知らず知らずのうちに共感疲労を蓄積してしまう。共感疲労とは他者へのケアから生じる心理的疲弊のことであり、悪化すれば燃え尽き症候群や離職傾向を生む。そこで必要なのが“支援者支援”である。



本書は、高齢者介護に従事する人々のストレスマネジメントに光を当て、彼らをどのように支援したらよいか、アンケートや聞き取り調査を通じて課題を分析し、その対策について論じる。心や感情に関わる問題は主観的な要素が大きく、何よりも本人が意識して覚知することが必要である。そこで課題になるのが、そうした自己覚知のための「支援ツール」作成だ。筆者らは共感疲労やそこからの立ち直り (レジリエンス) の諸要素を項目別に数値化し、因子分析等を通じて有効な支援ツールの作成を目的に研究調査を進めてきた。

本書は全 10 章からなる。第 1 章では高齢者介護福祉の現状、第 2 章では社会福祉労働における感情労働及び共感疲労について論述する。第 3 章～第 6 章が本論部分に当たる。ここで高齢者介護施設の従事者に焦点を当て、職務ストレスの構造、共感疲労およびレジリエンス分析を行い、そのキャリア形成の視点と課題について詳しく論じる。第 7 章及び第 8 章では、職務ストレスやレジリエンスのセルフチェックに関する支援ツールの活用方法やその結果について報告する。第 9 章は、家族介護者および要介護当事者へのインタビュー調査の概要、また第 10 章は訪問介護事務所でのサービス担当責任者のストレス要因の構造と対策について述べる。

感情労働は社会福祉労働者だけでなく、営業職や接客業などサービス産業に携わる人々すべてに関わり、共感疲労もまた大なり小なり付きものである。巻末には「職場ストレス・レジリエンスセルフチェックシート」も付いており、読者は自己チェックもできる。